



氷見市教育研究所

〒935-0016 氷見市本町 4-9

(氷見市教育文化センター内)

TEL 0766-74-8221 (代)

FAX 0766-72-8122

e-mail kyouikukenkyl@city.himi.lg.jp

ホームページ [http://www.city.himi.toyama.jp/hp/
menu000000500/hpg000000416.htm](http://www.city.himi.toyama.jp/hp/menu000000500/hpg000000416.htm)

師の教え

氷見市立北部中学校

校長 山本 晶

国語の辞書は、『岩波国語辞典（通称いわこく）第7版（2009年）』を愛用している。第2版（1971年）から版が改まるごとに買い求めてきた。辞書と言えば、だれしも『広辞苑』を思い浮かべられるだろうが、座右に置くには重すぎる。また、日常必要のない言葉まで掲載されており使いにくい。第7版の帯には、「言葉に自信」「日本語をきたえる」「頼れる『岩国』」の言葉があり、この辞書の特徴を見事に言い表している。

使い始めたのは、編者の一人、岩淵悦太郎先生の授業を受けたことにもよる。当時、斯道の権威としてだれ知らぬ者のない方であった。人柄そのものの誠実で分かりやすい講義で、言葉の力、大切さを説かれた。

最初に教わったのは、言葉の四要素について、「言葉には、認識、思考、伝達、創造の四つの働きがあり、言葉があるからこそ抽象的な思考も可能になる」というものであった。国語科教師として教壇に立つようになってから、4月の最初の時間は、常にこのことについて生徒と一緒に考えることから始めた。

おやっと思うことがあると、この辞書を引く。恥ずかしながら、この年になってもひよっとしたらこれまで違った使い方をしていたのではないかと冷や汗をかくことがある。そういう時に、「岩国」は微に入り細に入った説明が省略されているのがよい。「じゃ、あれは」と他の言葉も調べざるを得ない。一つの疑問が次々と別の疑問を引き出し、結果として言葉の知識が整理される。

コミュニケーション能力をはぐくむことの

重要性が言われて久しいが、生徒の模範となるのは、言うまでもなく教師の能力である。これが、肝心の言葉をいい加減にしたままではいかにもおぼつかない。最近では、テレビやラジオのアナウンサーの日本語に思わず首をひねることも多い。ともに言葉によって日々の仕事が成り立っていることを思えば、もっと気遣いすることが求められる。ついでに言えば、発言の際のメモの活用も工夫したい。滑らかな口調で話されても、よくよく振り返ると中味があまり感じられないことがある。同じことの繰り返しや別の見方だけでは、考えが深まらない。また、冗漫な言い方では、素直に受け止めてもらえないこともある。書くこと、辞書を引くことを通じて、どの教科の教師であっても自身の表現力を磨いていきたい。このことは、子どもの指導についても当てはまる。

教師として心がけてきたことが、もう一つ。志賀直哉全集（岩波書店）を編まれた紅野敏郎先生がいつも言われたことである。「教師たる者、年に何回かは熟慮を重ねたとびっきりの授業をしなければならぬ。そこで、学ぶことの面白さ、教師の力量を理解させることができれば、限られた時数の中、流すような授業をしたとしても生徒はついてくる」また、「passionate few（少数ではあっても熱心な生徒、先生の造語かもしれない）に配慮せよ」も忘れないようにしてきた。

いい加減な学生ではあったが、多くの師が「よりどころ」を与えてくださったことをしみじみと実感する。教師生活を終えるに当たり、心から感謝したい。

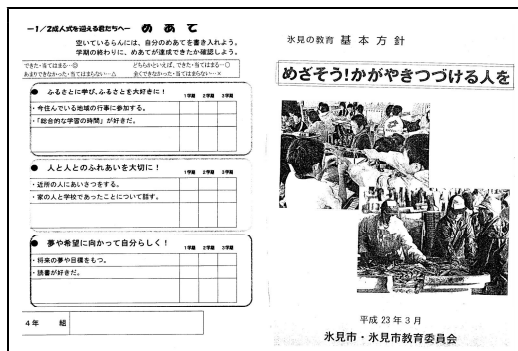
氷見の教育推進委員会の報告

教育基本方針研究部会

「氷見の教育基本方針」リーフレットの改訂と
「実践事例集」の作成
十二町小学校 校長 竹越 順子

平成 18 年に制定された「氷見の教育基本方針」について、その見直しと改訂の作業に携わりました。大リーフレットについてはまだ時間を要しますが、小リーフレットについては、写真等を一部差し替えるとともに、児童が目当てを書き込めるスペースの設定等を工夫し、新年度 4 年生に配布されます。ご活用ください。

また、3 つ目の柱「夢に向かって自分らしく！」について、「グリーンエコカーテンづくり」「1/2 成人式 -かがやきつづけよう-」「道徳の時間の指導」「社会に学ぶ『14 歳の挑戦』」の実践をまとめ、事例集を作成し、各校へ配布しました。今後の指導の参考にさせていただければと思います。



< 4 年生用小リーフレット >

小中連携研究部会

より効果的な小中連携の
在り方を目指して
十三中学校 校長 田中 英雄

本部会では、中学校区を核にした氷見の小中連携教育や小中一貫的な教育の在り方を研究してきました。

中学校区ごとで実践している「あいさつ運動」「健全育成 5 か条の作成」「夢を語り合うシンポジウム」など、小中連携の視点から効果的な取り組みを紹介することができました。これらの活動を通して、中学生としての自覚が高まったり、小学生の中学生へのあこがれの気持ちが高まったりするなど、成果が上がっていることがアンケートなどから伺えました。また、市内の小学校 6 年生と中学校 1 年生全員に中学校進学への意識調査を行いました。

湖南小学校と十三中学校では小中連携交換授業が行われました。小学校側の授業への細やかな配慮、中学校側の専門性の奥深さを双方の教師が互いに学び合うよい機会となりました。事後研修会も含めた交換授業が教師力の向上につながると強く感じました。

また、新学習指導要領の小学校での完全実施を前に、文科省の通知を参考に、本市や他市町村の小中学校通知表を分析しました。小中 9 年間を見通した通知表の記載項目や記載内容の改善点について検討することができました。

学力向上推進部会

「書く（ノート）指導」を通して学力向上を
上庄小学校 校長 浦山 博

学力向上推進部会は、氷見市内の児童生徒の、一層の学力向上を図るための具体的な方策を探り広めることを目指して活動しました。

全国学力・学習状況調査のこれまでの結果を踏まえた市内各校の取り組みには、授業の中に自分の考えを書く活動を取り入れて、思考力や表現力を育成しようとしている取り組みが多く見られました。また、県教育委員会で推進している「とやま型学力向上プログラム」においても「書く活動の充実」を重視しています。そこで、本部会では、「書く（ノート）指導」に焦点を当て、各委員の在籍校における実践事例を紹介することにしました。

小学校では、学年の発達段階を見通したノート作りのポイントを全教職員で共通理解したり、ノート指導を生かした学び合いにより考えを深め合ったりした事例を取り上げました。中学校では、シラバスの中にノートの書き方を示したり、教科の特性を生かした書く活動を取り入れた事例を紹介しました。これらの事例は今年度の「氷見市教育研究所だより」4～7 報に掲載しましたので、ぜひ参考にさせていただきたいと思います。

氷見の教育基本方針推進事業「1/2 成人式」

みんなの命 かがやけ ーぼく・わたしの1/2成人式を成功させようー

氷見市立海峰小学校 第4学年

4年生の子どもたちは、ちょうど成人の半分の10歳を迎える。世話をしてもらおう立場から、世話をする立場へと、大きく転換する大切な節目である。今年度、氷見の教育基本方針推進事業として、博物館や図書館の見学を含めた「1/2成人式」の機会を得た。博物館では、氷見市を支えた先人の努力や工夫を実際に肌で感じ、その苦労があったからこそ、今の自分たちは豊かな生活ができるのだと地域のよさを再確認しながら、地域への愛着を深める姿が見受けられた。図書館では、公共のマナーや社会施設の利用の仕方について学び、地域社会の一員としての自覚をもつことができた。これを機に、総合的な学習の時間や道徳・学級活動などを関連付けて、「みんなの命 かがやけ」の学習を大きく2つの実践で構成した。



実践1 「二つとない命」～自分の命を見つめ、夢や希望をもって生きよう～

まず、自分の命を見つめるために自分の名前の由来について家族に取材を行った。名前に入められた家族の深い思いを改めて感じながら、いろいろ助けてもらって生きてきたことに気づいた。また、「photo book 赤ちゃんが生まれる：金の星社」の本を活用して写真で命の始まりについて調べたり、「道徳資料 ぼくの生まれた日・あなたがもつ生きる力：文溪堂」などで命について考えたりすることを通して、たった1ミリの小さな命が大きく成長し、ものすごいエネルギーを使って生まれてくること、産声を上げた瞬間から自分の力で生きていくことなどを知り、驚きをもって「二つとない命」を実感していた。「相田みつをの詩：自分の番」の学習では、自分の命は何世代もつながるもの、何千人もの命を背負って今を生きている、決して一人で生きてきたわけでない、だから簡単に「死」なんていう言葉を言うてはいけないと立ち止まって考えた。

命のきずなは見えなくても、深くつながっていることがよく分かりました。何万分の1の確率で生まれてきたわたしは、今、生きていることをみんなに感謝したいと思いました。

【女子児童】

そして、これまで愛情をもって育ててくれた家族はもちろん、多くの友達や地域の方へ、学習発表会で自分の夢を伝えることにした。命のバトンを受け継いで今を精一杯生き、一人一人がこれからその命をつなげていく

囲碁のプロになり、いろいろな人と交流するのがぼくの夢。努力できっとかなえられるんだ。がんばれ、未来のぼく。そう言って前を向いたら、ほら、今そこに夢への一本道が輝いている。 【男子児童】

という使命をもって、「10年後、20歳になった時、自分はどのような人になっていたいかな」と自分の将来に向き合う様子があるのがうかがえた。学習発表会では今の自分があるのは多くの人の愛情や努力のおかげであることに感謝し、この世にたった一人しかいない、自分という存在を大切に思う気持ちを込めて、未来の自分へのメッセージや夢、希望を伝え、会場は感動に包まれた。こうして生まれた夢の種は、10年後、大きな花を咲かせてくれるだろう。

実践2 「つながり合う命・限りある命」～みんなの命を大切にしよう～

「道徳資料 ハクチョウの湖・瓢湖：文溪堂」の学習では、ハクチョウを愛し、親子二代にわたって自分の生活を犠牲にしてまでハクチョウの命を守り、環境整備に尽くした吉川さんの強い思いについて考えた。子どもたちは、人間だけでなく、動植物、すべての生き物が限りある時間の中で命を輝かせていることを理解し、その重さはどんな命もかわりがないことを感じ取っていた。また、人権教室「命を守る：西田弘さん」では、親ハクチョウが子ハクチョウを思う気持ちの強さ、愛の深さについて、VTRを交えて教えていただいた。ハクチョウが自然の厳しさに耐え、必死に家族や仲間とともに生きぬいていく様子を目の当たりにして、命を守ることがいかに大変か、それがどれほど尊いのかを心に刻むことができた。そして、吉川さん、西田さんの動物の命を自分の命と同じように大切に思う生き方にふれることを通して、何ものにもかえることのできない生きることのすばらしさを実感した。

吉川さんも、西田さんも動物の命を自分の子どものように考えていることがすごいと思いました。ハクチョウと心をつなげて、一生懸命世話をし続けている姿に感動しました。

【女子児童】

この取り組みを機に、自他の命、すべての命を慈しむ心を一人一人が大切に育んでくれることを期待している。

平成22年度 教育論文・教育実践記録の審査結果

本年度は小・中学校合わせて14編の教育論文・教育実践記録の応募がありました。内容は、国語2、算数3、家庭1、体育1、保健2、道徳1、総合的な学習の時間1、特別活動《学級活動》1、健康教育1、学習指導（学校全体での取り組み）1と多様な分野での実践でした。

どの論文・実践記録にも「書く」ことの指導に力を入れた実践が多くあり、ノート指導、各種カード・付箋紙の活用など参考にすべきものが見られました。



<発表をする吉井教諭>

《 入 賞 作 品 》

	学校名	氏 名	研 究 主 題
一席	比美乃江小	吉井 愛美	かかわりを大切にし、 自分に自信をもつことができる子どもの育成を目指して － 第5学年家庭科の学習を通して －
二席	朝日丘小	窪田 絵美	算数大好きな子どもを育てるための 「分かる！できる！使える！役立つ！」が実感できる学習
三席	上庄小	大菱池仁子	粘り強く対象とかかわり、 主体的に追究していこうとする子どもの育成を目指して － 総合的な学習の時間「おもしろい！ぼく・わたしの「庄りんご」の実践を通して－
三席	南部中	石田 正美	主体的に健康課題を解決するための、 実践的な能力や態度を育てるための支援はどうあればよいか － ゼロメディア運動に取り組む生徒会執行部・保健委員会の活動を通して－
学校賞	南部中	研究推進部	ねらいの明確化と書く活動の充実を通し、 学習意欲の向上や学習習慣の確立を図る指導はどうあればよいか ～ 「とやま型学力向上プログラム」の推進を通して～

※ 詳しくは、紀要266号「平成22年度 教育論文・教育実践記録集」をご覧ください。

表彰式において、西部教育事務所 主任指導主事 山本 良一先生より、講評をいただきました。入賞された皆さんのよい点などを紹介された後、今後、教育論文・教育実践記録にまとめる際に留意してほしいことを2点教えていただきました。

○ 評価の妥当性を高める工夫

「意欲が高まった」、「子どもの目が輝いた」などはどんな取り組みからそう言えるのか。

アンケート、測定など数量による客観的評価と子どもの発言、抽出児の言動など質的評価からみることが大事である。

○ 一般化したものを他の指導に生かす工夫

仮説に基づく視点に沿って実践を行い、検証されたものを一般化して、他の指導でも活用してほしい。

論文や実践記録にまとめることは、大変な作業ですが、日々の実践を客観的に振り返るよい機会となります。来年度は、さらに多くの学校や先生方から応募があることを願っています。